

交通事業者向けバリアフリー研修会

バス運転手さんに実践的な知識を



会の第1回目から講師を務める山崎涼子さん。バス運転手さんに優しくアドバイスをされていた。



同じく講師の今福義明さん。「僕は年間300回バスを利用。車いす、ベビーカー、高齢者と乗客も多様化し、周囲の理解も浸透しつつあるように感じます」



車内での視覚障がい者誘導訓練。1名が運転席で誘導し、もう1名がアイマスクで歩行。

実技で理解を深める

障がい者の方々への社会参加、高齢社会への対応をふまえて、交通事業者向けのバリアフリー教育訓練・BEST研修会が開催された。これは交通エコロジ・モビリティ財団が主催し、平成19年から鉄道事業者やバス事業者の職員向けに実施されている研修会で、今回で15回目。今回は都内バス事業者の職員、約30名が集い、9月下旬の2日間行われた。

「障がいをお持ちの方々が実際にどんなことで困っておられるかなど、バス事業者の方々へ理解と知識を深めてもらうのが目的です」と語る交通エコロジ・モビリティ財団バリアフリー推進部長の岩佐徳太郎氏。

初日は「障がいのあるお客さまの日常生活と移動」など講義が中心。2日目は接遇・介助法を学ぶ実技演習を障がい当事者の方が講師となり実施。障がい者の方実際に接することにより、学べるのがこの研修の大きなメリットだ。

実技は、まず視覚障がい者体験を実施。その後、車いすによるバス乗降



別会社同士でグループディスカッション。コミュニケーションが大事との意見が多かった。



研修を終えた参加者全員に修了証が授与された。

訓練へ。講師（電動車いす使用者）のバス乗降をサポートするという実習だが、これがなかなか難しい。指名を受けた若いバス運転手さんが、乗降口と板を渡し、車内へご案内しようとするが、電動車いすが重い上、乗降口と板のジョイント部のわずか2cmの段差が通過に影響してしまう。

「2cmの段差でも強い衝撃を感じるものなのです。だからタイミングが重要。実技を通じて力加減やコミュニケーションの大切さをもっと伝えていきたい」と講師の山崎涼子さん。

一番大切なことは、何をして欲しいのかを相手に確認すること。実技を通して改めてその重要さを感じる。

バス運転手さんは通常業務で車いす使用者と接しても、実地的な留意点を聞くことはほとんどない。必要な接遇とは何かを知る貴重な体験だ。

実技の後、2日間の研修で学んだことをグループでディスカッション。最後は班の代表者が参加者全員の前で発表し、成果を分かち合った。

今後は一般乗客の研修も実施したいと岩佐氏。真のバリアフリー社会を目指し、新たな試みが始まっている。